



試歩一步百歩へ須臾ぞ夏初
青嵐目玉より声出でにけり
わが身より出でしががんばかと思ふ
髪洗ふ角生えさうなひとところ
慰霊の日歩けぬ足が歩き出す
ユダヤ人シベリアの夏逃避行
縦はつねに考へてをり梅雨深し
樵夫^{きこり}とは樹液のやうな汗を噴く
まばたきも許さぬ行司くも合戦
日照雨受け紫陽花菩薩毬菩薩
墓一步一步に揺るぎなし
水底は象の墓場や青嵐
夏葱に土やかつかつ石の唄
喜雨慈雨と言ふは農家の涙かな

*

鯖鮓や男死ぬまでなまぐさき
山人の礼に始まる漆搔
少年のおねしよの記憶乱歩の忌
風鈴に選ばれざりし風もあり
テラーの首の巻尺半夏生
わが殯の部屋開け放つ安曇野祭
君に逢ふ瞬間が好き夏が好き
分去れの加藤周一夏蝶来
観音は村のひとりや海芋咲く
星涼し蹴りし石ころ叢へ
林檎摘花脚立移すに津軽弁
玉葱の穫れて不揃ひなる余生
観音の千の手に風涼しかり
一万本夕菅咲くや石廊崎
踏台に乗らねば出せぬ夏帽子
向日葵に負けてたまるか暑氣払

国見敏子
金子圭子
宮坂やよい
野口美智子
眞榮城いさを
伊藤木公
渡辺真帆
小熊里利
愛甲敬子
百瀬石涛子
石井立文
藤本光子
福田紫枝子
内藤謙一

志摩晴樹
柴田洋子
島形英美子
伊藤由希子
岸元忠義
曾根原幾子
芳川莞久子
後藤行雄
岩井かりん
佐久間梨江
菅原砂登子
日立早
福島米雄
大井信子
上條静子
若林敏明

岳俳句・拓くことば 九月

(457)

宮坂 静生

はじめに。ぎりぎりまで作句をがんばりましょう。体調が不調でも、ぜひ氣力を起こして、ノートに書く。手を動かすと頭がついてくる。このところ暑さのためか不調が多いので。

試歩 一步百歩へ須臾ぞ夏初 国見 敏子

一歩足を出す。自分をはげましている。一歩踏み出せば百歩へはすぐに。病後のリハビリに試歩中の作者。私も先年、鬱的な症状に陥ったときは、一歩足を出すのがむずかしかった。電車に乗るのに、ホームから乗り込む足が出ない。エスカレーターの下へ降りるのが怖ろしい。健康者にはわからない心理にはじめて気づいたものだ。どうぞお気軽に。

青嵐 目玉より声出でにけり 金子 圭子

頭のとっぺんから、あるいは後頭部から声を出す訓練を竹内敏晴さんがやっていた演出を見たことがある。大学でコミュニケーション論「声」の出し方を教授していたときだ。声は口からだけ出すものではない。指先からも目からも鼻からも、体の部位いたるところから出すことができる。稽古、訓練が大切。やはり、一番むずかしいのが「心」から出す声。竹内敏晴『生きることのレッスン』（トランスビュー）も

『ことばが劈かれるとき』（思想の科学社・ちくま文庫）同様に名著と思う。圭子さんは句の役者。目玉から声が出た。青嵐のときに。ふと思うに、出した声を体に収めることも大切になってくるであろう。体を柔らかくして。

わが身より出でしががんばかと思ふ 宮坂やよい

脚の長い蚊とんぼ。よろよろ、おろおろ、どこか間抜けた様子。あわてると脚を一、二本残したりして。わが分身とみた。謙譲の心をもった健全なバランス感覚からの発想だ。明るい作者。

髪洗ふ角生えさうなひとところ 野口美智子

着想と表現がおもしろい句だけに、耳にしたような思いに誘われるが、独自の作。ベテランの女性作者でない、角のあり処など、そんなに気づくものではない。そのへんがいく分硬いかな。女性の愠気は古来大テーマ。近頃は男にも角が生えるらしい。その始末のわるさは女性以上。季語「髪洗ふ」は明治以後、近年のもの。どこか戦後の味いもある。

ユダヤ人シベリアの夏逃避行 伊藤 木公

ユダヤ人がシベリアへ逃げ込む。第二次大戦中のことか。

リトアニアのカウナス領事館に赴任した杉原千畝がユダヤ人に日本経由のビザを発給したことは名高い。助かる保障があるわけではない逃避行はたいへんなこと。木公さんが社会性あるテーマに挑んだ句として記憶しておきたい。

樅はつねに考へてをり梅雨深し 渡辺 真帆

樅の木が考え深い木との着想に共感した。小さな木はクリスマスツリーに綿雪をつけられて飾られる。大木はスタイルよし。葉の滋味あるさまも、知恵がさきさきまでゆきわたっているようだ。梅雨の中の樅の木。ぐっしり濡れて立つ。

樵夫とは樹液のやうな汗を噴く 小熊 里利

わかりすぎるが、さらさら・どろりどろり・じゅぶじゅぶ

今月の秀句

慰霊の日歩けぬ足が歩き出す 眞榮城いさを

沖縄忌ともいう。六月二十三日が沖縄戦敗北の日。慰霊の日という。慰霊祭が催される会場まで、もしやと思われた足が運べた。なんとしても出たいという沖縄人の土根性が詠われ、忘れたい沖縄戦に仆れた人々への熱い思いを身をもって示した句。宮古島在住の作者。先年お会いした折は元氣そのものであったが、氣持は昂じても体調がついていかない。その中で、岳集投句もされ、全力投球に感銘している。

した樹液の粘液質のかたまりを想像することから樵夫の苦勞のさまが実感される。木のこと山のことならお任せと、自信をもって詠う作者の向日性がたのもし。木や山の句材が意外に多いことも作者によって気づかされるのがうれしい。いま樵夫を詠う先見性がいい。一番注目されない句材はなにかを見つけて、そこを掘り起こすこと。それが先見性だ。

まばたきも許さぬ行司くも合戦 愛甲 敬子

鹿児島は蜘蛛合戦の地。さすがに、句に隙がない。隙をみせると蜘蛛合戦の行司などつとまらない。一瞬の動きが勝敗のわかれ目。見物する者も真剣。

日照雨受け紫陽花菩薩 穂菩薩 百瀬石湊子

平凡な花と見る人が多い紫陽花を菩薩と見た。天気雨でかがやく。毬型の花を菩薩貌という発見。花の色が七色に変わる。花期の長さにも耐えており、仏性が感じられようか。老賢の感性の厚みに、人生体験がにじむ。句集上木後、ますます元氣。

墓 一步一步に揺るぎなし 石井 立文

特段の新味はないが、手堅い。墓の一步一步ががちりとイメージされる。この上に、墓の新味を出すにはどう詠んだらよいか、その点を考える出発点にあたるような一句を推奨した。これは作者だけではなく、「岳」のみんなのために。

水底は象の墓場や青嵐 藤本 光子

拓くことば ③ 自句寸言①「死にがたし」

死にがたしとて蓼虫のあつまれる 昭和53年

「鷹」（昭和五十三年四月号）。『日本名句集成』（学燈社・平成三年十一月刊）に〈寒鯉の水の筋金呑みしごと〉の句と出て、この時期の代表句にされた。倉橋羊村の鑑賞が付く。宙吊りの蓼虫が自分の運命の決着をつけようとしないうえに優柔不断さを詠んだものという。地味な着眼の句で、自分でもなぜ注目されたのか分からない。山村の村人の櫓山節考的な姿か。地貌の句には違いない。句集『山開』所収。

風音を聴きに小諸へ弥生尽 昭和53年

「鷹」（昭和五十三年六月号）。「悼 谷内俊夫画伯」と前書。三月三十日、小諸下河原の谷内宅へ弔問。小諸高校での同僚查掛、宮崎両女史も来ている。後、徳子の車で信濃追分の油屋へ行く。水彩画を学び風交を楽しんだ画伯との思いが深い。追分から浅間山を仰ぐ。『山開』所収。

毛糸こがすにほひ二月の創刊誌 昭和53年

「岳発刊」と前書。昭和五十三年二月一日創刊。「鷹」長野県支部結成十周年に出されたもの。代表同人静生。

二月四日、穂高町有明のサン・クラブ穂高で記念吟行。翌日、松本市縄手の松本厚生文化会館で記念大会を行う。創刊趣旨に「風土に根ざした詩としての俳句の特異性をさぐりたい」とある。

晴れやかな句ではない。私には気負いがなかった。藤田湘子と松本城山のまきば山荘の湯に浸かりながら、「静生さん、俳誌を出そう」としきりに勧められた。名は「岳」。「一緒にいた清水治郎を事務局長に。「はあ」の一瞬で決まった。前山集同人、座光寺亭人以下二十名。岳集、小沢実以下五十六人。エッセイ「私の中の「岳」（湘子）「創作と風土」（飯島晴子）。編集長丸山澄夫。当面隔月刊。三十四頁。掲句はそのあれよあれよの感を詠ったもの。地に触れた生活感からの立ち上げ。そんな意識もないほど淡々として。湘子が感動的な序文を書いてくれた第四句集『樹下』巻頭句。

天上も水温むころ闇に馬 昭和53年

「岳」（第二号・昭和五十三年四月）。「悼 高橋玄一郎」とある。一月三十一日、胃癌のため逝去。七十三歳。三十六年、根津芦丈に付いて連句を開始して以来の友人。内心は闇、仏頭のような温顔、雰囲気はぬっと馬。佐藤惣之助門の詩人。シャイな村夫子然の文人。『樹下』所収。

象が滝をくぐり、その奥の水場にゆく。死期を悟って。『家の墓場』（楡周平・光文社）は読んだことがないが、そんな題名の本は承知している。五十年余の寿命を察知した象が水中で死を迎える想像はなかなか深い。さかんな季節の青嵐も一句に厚みをもたらす。

夏葱に土やかつかつ石の唄 福田紫枝子

土用の葱の土寄せ。石が鍬の刃先に当り「かつかつ」音がある。時間をかけたひねもすの作業か。地味ないい方、「石の唄」がおもしろい。冬の句であるが、〈夢の世に葱を作りて寂しさよ〉（永田耕衣）を思わせる。同じ味わいがある。

喜雨慈雨と言ふは農家の涙かな 内藤 謙一

日照り続きに降るに雨が「喜雨」「慈雨」。雨が降ったと農夫はばいばいと泣く。素朴なこと、一句の心を全部口に出したような作であるが、このようにいい尽した句もないともの足りないという人もあろう。巧い句だけではなく、腹の足しになるような句もいいではないかと。六十余年も俳句作りにかかり、そんな気になってきた。

雪嶺集、前山集からの推薦候補作を掲げる。

死ぬことは忘らること杉落葉	円城寺 龍
火の極みとは白き色夏の窯	矢島 恵
腸の癒ゆる疼きやみどりの夜	曾根原幾子
捕虫網かざす頭上にオスプレイ	満田 光生

ヴィオロンのごと噴水にささやかなる	唐澤南海子
虫篝坂東平野燐り満つ	原 あや
山入の礼に始まる漆搔	柴田 洋子

漆搔は漆の木に刻みをつけ、漆を搔く作業。中国からの輸入に頼っていた漆だが、近年日本での生産に力を入れている。漆山に入る礼をする。こゝから漆搔の神聖な仕事が始まる。職人の所作が美しい。俄然作品に力が入り、注目した。

少年のおねしよの記憶乱歩の忌 島形英美子

寝小便を「おねしよ」とは懐かしい。寝小便と江戸川乱歩、ふしぎさがある。江戸川乱歩は明治二十七年十月二十一日生まれ。昭和四十年七月二十八日逝去。探偵小説家として名高い。石榴忌という。蒲団に地図を画くと称し、少年はよく寝小便をした。家人に告白するのが切なくて、なんとはいえばよいか、少年の悲しみの始まりは「おねしよ」の告白から始まる。探偵小説が書かれる種子を拾ったようなおもしろさ。佳句。

風鈴に選ばれざりし風もあり 伊藤由希子

風鈴が風を選ぶとの着想がいい。風鈴を鳴らして過ぎる風は風の中でも優等生。目に見える行為をした。人目に触れないで、吹きゆく風もある。大方の風はそれ。忘れられた存在の風に注目したやさしさに感心した。秋田勢が大いに盛り上っている。その中のおひとり。ほかの風方にもよろしく。

テ－ラーの首の巻尺半夏生 岸元 忠義

仕立服店の光景が目に見える。忙しく客の注文服の寸法をとるテ－ラー。いつも首に巻尺を付けている。半夏生は夏至から十一日め。七月二日頃。毒草の半夏（からすびしゃく）が生える頃という。田植が終る頃で、畑作祝の日とも。半夏雨は大雨になるとか。中国の七十二候の一つ。飛騨高山のテ－ラーであれば老舗の本格派。力をつけてきた作者。水口武彦さんからバトンタッチし、住斗南子大人から高山のまとめ役に指名された。

わが殯の部屋開け放つ安曇野祭 曾根原幾子

作者は八月一日逝去。〈腸の癒ゆる疼きやみどりの夜〉といい、本人も恢復に向いつゝあると信じていた矢先のこと。孫の婚を（六月の船出の額に北極星（祝婚 聡美）と詠む。かたや、ご自分の骸が棺に入れられ座敷に据えられた光景を掲句のようにしたためる。用意周到、なかなかの才人。死後に開かれた句会にも事前投句されており、いまだ生存しているかのようなおどろきを与えた。男まさりということばはいまでは平凡であるが、生涯、なにごともし率先しテ－プを切った作者の活気に満ちた生き方を讃えたい。ぎりぎりまで句が張りを失っていない。安曇野祭のさなか、棺の中で祭囃子を聞きながらこの世からグッドバイをするとは、曾根原幾子にふさわしい千秋楽ではないか。岳俳句会への尽力大。深悼。

君に逢ふ瞬間が好き夏が好き 芳川莞久子

んな一句から俳句を詠む愉しさが拡がる。期待の若手新進。

林檎摘花脚立移すに津軽弁 菅原砂登子

「津軽弁」の止めで、摘花仕事の相棒との会話が躍動した。林檎の花とりでも、林檎農家にとっては休む暇がない。津軽の空が見えるようだ。

玉葱の穫れて不揃ひなる余生 日立 早

気ままな余生なのであらう。玉葱も不揃ひであるが、自分の暮しのあれこれの思い一句にした意欲がよい。

観音の千の手に風涼しかり 福島 米雄

原句は上五が「千手観音」。こゝは観音のみでよい。千手

今月の秀句

鯖鮓や男死ぬまでなまぐさき 志摩 晴樹

鯖鮓には好みがある。鯖街道を来た鯖鮓など、その魚肉の厚みが口いっぱいに充ち、私は好きだ。しかし、鯖のくさみを好まないむきもある。女がなまぐさいとはきかない。本来、いうまでもなくなまぐさいのが持ち味か。それに対し、男はさっぱり、きっぱりが本性。作者はそこに意義申し立てをした。封建武士の世とは違い、現今、男は生涯なまぐさい。なかなか枯淡の境地とはいかない。老いていよいよ云々。

一句の切れがすばらしい。「瞬間」が生きている。それも盛夏の光をふんだんにちりばめて。どこか大人の恋。じめじめしない。一行詩の俳句は、瞬間を捉えるときにもっとも力を発揮する。詩型のもつ力をしっかり身ににつけつゝある作者。生きるとは、ネチネチするところをさりと切りとること。その才が巧み。

分去れの加藤周一夏蝶来 後藤 行雄

中仙道と善光寺北往還との分去れ、信濃追分の地。そこに加藤周一を据えて、見事な初夏風景を演出した。旅宿油屋が周一の定宿。近くに堀辰雄文学館も福永武彦の山荘もある。周一と夏蝶との取り合わせに作者の意欲的な生きる上でのセンスを思う。高原の透明なひかりにみちた佳句である。

観音は村のひとりや海芋咲く 岩井かりん

村のお堂に観音さまが祀られている。村人の日常が観音さまと一つに融け合って、海宇の花も潮風通う素朴さを思わせる。瀬戸内あたりの光景か。日本の土俗へしずかに切り込むかりんさんの知情備わったことはのセンスが生かされている。

星涼し蹴りし石ころ叢へ 佐久間梨江

夕方の散策途上の囁目吟。つまりて蹴った石が叢へ入った。只それだけのことが、いかにも夏の夕を思わせる。なにか特別なことを詠わなくても、思いが読み手に伝わればよい。「叢へ」の平凡な軽さ。くさむらの音感のやさしさ。こ

観音は千の目と手で慈悲と救済のはたらきをするという。涼気もおのずから信仰心にかかわらう。作者は唐招提寺の門前に住み、いよいよ信心深い。

一万本夕菅咲くや石廊崎 大井 信子

一万本との数を出し、石廊崎の荘厳さが見えるようだ。生きていることに迫力ある作者。気力旺盛。どうぞお元気で。

踏台に乗らねば出せぬ夏帽子 上條 静子

天袋か棚の上のコードに入れてある夏帽子。暑い夏に備えて帽子を用意する。「踏台に乗らねば」と、お宅の事情をこまごま出したことがおかしい。けがをしないようにとの気遣いも出て、こんなちまいましたことも一句になる見本。

向日葵に負けてたまるか暑氣払 若林 敏明

周囲に向日葵が咲いて暑さひとしお。「負けてたまるか」といゝつゞけてすごす毎日。ときには一ぱい。凡々たる日常が作句によっていきいきするさまが目に見えるようだ。

岳集推薦候補作を掲げる。

仔猫の名直と曲がりやさくらんぼ 西村 美枝
冷し酒これが最後と通夜の友 宇佐見房司
天の川急須の蓋に穴ひとつ 飯田 和子
この秋は信濃を訪はむ濃紫陽花 中岡 草人
谷崎忌墨の香に夜気まじりゆく 滝川 陽子